

判断力と方向性

村山盛忠

奨励者紹介〔むらやま・もりただ〕

日本キリスト教団大阪生野教会・協力牧師

ファリサイ派とサドカイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを見せてほしいと願った。イエスはお答えになった。「あなたたちは、夕方には『夕焼けだから、晴れだ』と言い、朝には『朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることは知っているのに、時代のしるしは見る事ができないのか。よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。」そして、イエスは彼らを後に残して立ち去られた。

(マタイによる福音書 16章1—4節)

平面的歩み 垂直的歩み

ただ今聖書のテキストを読んでいただきましたが、この箇所を読む時、3年ほど前に出会った方がロズさんだ詩が浮かんできました。パレスチナ人のアブ・シッタさんという方で、大学の先生であり、また長年国連の研究員として活動された方です。彼は、大阪での講演が始まる前、数人の有志と談話している時に、日頃自分がロズさんでいる古くから伝わるアラブの詩をアラビア語で静かに流れるように語りました。そして、英語でその大意を紹介してくれました。

「友よ、前方に広がるこの地を歩む時は、ゆっくりと静かに歩こう。足音高く地を鳴らして踏みしめるのではなく。この地の下には多くの人間が眠っているのだ。ある人は苦しみながら、ある人は飢えながら、ある人は血を流しながら無念の思いで眠りにについている。だから友よ、この地を歩く時は、ゆっくりと静かに歩こう」と。

アブ・シッタ先生は日常的に、目の前で家屋が破壊され土地を奪われその地に住んでいる人々が追放され亡くなっていく現実を、無言のうちに心に刻んでいるのが伝わってきました。

最近読んだ本に、このアブ・シッタ先生のアラブの詩と全く同じ視点に立つ詩が紹介されていて、とても深い共感を覚えました。それは次のような詩です。

生死の生をほっぽり出して
ねずみが一匹浮彫(うきぼり)みたいに
往来のまんなかにもりあがっていた
まもなくねずみはひらたくなった
いろんな
車輪が

すべって来ては
 あいろんみたいにねずみをのした
 ねずみはだんだんひらたくなった
 ひらたくなるにしたがって
 ねずみは
 ねずみ一匹の
 ねずみでもなければ一匹でもなくなって
 その死の影すら消え果てた
 ある日 往来に出て見ると
 ひらたい物が一枚
 陽にたたかれて反っていた
 (山之口獏「ねずみ」『鮪に鯛』)

この詩は山之口獏の「ねずみ」と題する詩です。山之口獏はご存知のように沖縄出身の詩人です。この詩を引用している本は、作家・辺見庸が著わした『完全版1★9★3★7 イクミナ』と題する、上下二巻の文庫本です。この1937(イクミナ:「征くみな」で征服・戦争の意)年というのは、南京大虐殺が起きた年です。辺見庸はこの本を書く前に、何回もこの詩を詠んだと記しています。著者は次のように記しています。

「いつの日か殺されたひとの死骸でもある。時間でもあり歴史でもあり意味でもある。ネズミははずれきたるべきわたしだ。いつときもりあがってしきりに血をながしていたひと、そして時間も歴史も意味も、やがては巨大なアイロンかロードローラーでくりかえしのされたように、天日に乾き、ひらたくなる」と。人が一人の人でなくなり、その死の影さえ果ててしまうのです。

現在、日本では「南京大虐殺」などなかったという人すら出てきています。また戦争というのはどこでも起こり得ることで、取り立てて言うことではないという論者もいます。作家・辺見は、自分がその場にいたらどうだったかを突き詰めて問うています。相手を殺さなければ、自分が殺されるではないかという問いかけも聞こえてきます。

今日の聖書の箇所から、以上の重なり合う二つの詩を思い出したのは、目の前にある人生という道を歩む時、現実に目の前にあるコンクリートで舗装され、整地された道を歩いていくのか。あるいはその道を掘り起こせば、見えない世界、見えなくなってしまった人間の時間や歴史も意味も問い直すことなく歩むのか、という問いがあるからです。これは平面的な直線の歩みと、想像力をもって掘り下げる垂直的な歩みと言ってもよいかもしれません。もちろん両者は一体のものですが、現在あまりにも平面的な直線の歩みのみが強調されているように思うのです。立ち止まり想像力を再起させることの大切さを思うのです。

判断の基準と方向性

私は、長年教会の牧師として働いてきましたが、「キリスト教の特徴とはなんですか」また「聖書は我々の歩みにとり何を基本的に語っているのですか」と問われた時、次のように答えてきました。「聖書を読み、

信仰生活をするとは、日常の歩みの中で、的確な判断力をもつこと、そして的確な方向性を見定めることだ」と。「今日の聖書の箇所から、判断の基準と、方向性」を学ぶ知ということです。

イエスの時代も現代の日常生活と質的には少しも変わりがないということです。目に見える舗装された道をどのように歩いていくかという生き方と、一方で目の前の舗装された以前のでこぼこの地下に埋もれた歴史と時を見つめながら歩む生き方です。

当時、二つの大きな宗教グループがありました。ファリサイ派であり律法学者のグループと、当時のユダヤの国の政治権力を支えるサドカイ派のグループです。人々が日常生活を歩むうえで、どのように判断したらよいかを、倫理的、政治的判断を下し人々にその方向性を示したのがファリサイ派であり、サドカイ派でした。たとえば、週2回断食することで正しい生活ができる。安息日を守ることで神に祝福されるという判断です。前者は信徒集団であり後者は貴族階級に属する司祭集団でした。この両者は信仰上の教義も社会的な生活も全く違うのですが、イエスを試みるためには一致したのです。

イエスが語った言葉は人々の心をつかみ、多くの民衆が話を聞きにやって来たので、ファリサイ派の人々も、ユダヤ国を支えるため神殿宗教を重んじるサドカイ派の祭司たちにとっても、おもしろくありません。おもしろくないというよりは、自分たちの生き方や信仰が批判されているという不安を覚え始めているのです。そこで今日の箇所では、次のような問いをイエスにします。「あなたの語る言葉が、真に神の言葉ならば（真実ならば）、神からの（真実である）しるしを見せてみよ」と。イエスはそのようなしるしを求める質問の背景に、平面的な日常生活で人々が物事を判断しながら歩んでいる姿を見抜いています。そして次のように答えています。「夕焼けだから、晴れだと言ひ、朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だと判断している。それなのに時代のしるしを見分けることができないのか」と。

「カイロス」と「クロノス」

イエスは、「今、どういう時代に生きているのか分からないのか」と問い返しています。ここで時代と訳されている原語は、カイロスという言葉です。時間を意味する言葉にカイロスとクロノスという用語があることをご存知だと思います。一般的にカイロスは「時」と訳され、クロノスは「時間」と訳されています。カイロスは危機的な時、決断、変革を迫られる時を意味しています。かつて南アフリカのアパルトヘイト廃絶を求めた声明文書は、「カイロス文書」と称されました。現状の流れる時間の中に身をまかせて流されていてよいのかと訴え、判断を求めたのがカイロス文書でした。

平面的な歩みの具体的な姿を聖書は次のように語っています。人間存在の価値判断をどこで決めるかということでもあります。マタイによる福音書でイエスは次のように語っています。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」（5章45節）と。悪人と善人、正しい者と正しくない者を、我々は判断して人間を捉えているが、天の父（神と言ってもよいですし、命の造り主と言ってもよいでしょうし、人の考えを越えた他者と言ってもよいでしょう）は、人間をそのように捉えていないということです。

通常、我々の判断の基準は、プラスかマイナスか。勝ちか負けか。得か損かが一般的でしょう（三木清という哲学者は、勝ち負けの基準は、ゲームやスポーツの世界でのみ可能であり、人生において勝ち組負

け組はないという主旨のことを述べています)。ファリサイ派やサドカイ派が天からのしるしを求めたのは、究極的には自分たちの主張するこの地上での勝ち負け、正と不正、善と悪の判断を求めているのです。しかし、イエスは、「時のしるしを見分けることができないのか」と述べて、人間の「危機的な時」、そしてその時代に目を向けていると言ってよいでしょう。

魂をはかる

人間存在のあり様を、聖書はどのように判断し見分けようとしているのでしょうか。一つの示唆を与えている聖書の箇所があります。箴言16章2節(口語訳)に「人の道は自分の目にことごとく潔しと見える、しかし主は人の魂をはかられる」と。はかるとは秤でもって計るのですが、秤は重さや長さを計るものです。魂は形がありませんし、したがって重さも量もありません。はかりにはもう一つの秤があります。それは家を建築するとき用いられる「さげふり」です。垂直に柱が建っているか、土台に高低がないかを、糸の先に錘(おもり)を垂らして測るものです。我々の存在、魂は点数や数で計ることは不可能です。聖書は命の造り主との垂直な関係ではかるのだ、と述べるのです。

渡部良三の『小さな抵抗』

渡部良三さんの『小さな抵抗』という短歌歌集をご存知でしょうか。最初にこの歌集が出ましたのは1994年ですから、もう23年前のことです。シャローム図書から出版されたのですが、右翼から出版社に対する嫌がらせがあり、著者の渡部さんは出版社に迷惑をかけてはならない、と廃刊にしました。しかし、6年前の2011年に岩波書店(現代文庫)から再版されました。私自身は著者とは出会ったことはないのですが、初版の本を紹介して下さった先生をとおして手紙のやり取りがあります。

渡部さんは現在95歳ですが、先のアジア・太平洋戦争で学徒出陣で中国北部河北省に二等兵として派兵されます(44年3月)。現地での2カ月後の朝食時に、分隊長の上等兵から「今日は上官の配慮により肝試しをする。八路軍(共産軍中国兵)捕虜を突き刺し殺させてやる。殺人演習だ」との発言があり、一瞬部屋中が凍りついたようになります。

渡部良三さんの父親は内村鑑三の弟子で、日頃から聖書の言葉に親しんできました。出征する前夜、旅館で息子の良三さんに「外交官は国家間にトラブルが起こった場合、それを最小限に収めるよう努力するものだ。一介の兵士でも戦地で外交官以上の成果をあげることができるはずだ。どんなときにも神さまに祈れ、かならず神は答えてくださる」と言われました。

中国人の捕虜が連れて来られます。49人の新兵はオロオロするばかりです。上官の命令は天皇の命令でもあり絶対です。1人目、2人目の捕虜が銃剣で突き刺されていきます。そして土の穴に蹴落とされていきます。渡部さんは5人目の捕虜を最初に突き刺す番だと分かりました。父の言った声が聞こえます。「何かできることがあるだろう」。この言葉を反芻しているうちに、「キリストを着よ。すべてキリストに依らざるは罪なり、虐殺を拒め、生命を賭けよ」と、ごうごうとした地響きのような中で聞いたと言います。渡部さんは上官に向かって言いました。「信仰のゆえに殺しません」。異様な雰囲気の中で、びりびりするような痛みを体感じたとのことでした。

このような経験を渡部さんは、ノートですぐに見つかりますので、紙切れに短歌として記しました。紙切れだと目につきにくいからです。

- ・捕虜殺す兵の心を問いめぐる教官の眼の獣めき見ゆ
- ・祈れども踏むべき道は唯ひとつ殺さぬことと心決めたり
- ・「捕虜殺すは天皇の命令(めい)」の大音声眼(まなこ)するとき教官は立つ
- ・「捕虜ひとり殺せぬ奴(やつ)に何ができる」むなぐら掴むののしり激し

当然、昼夜の別なくリンチが待っていました。

- ・かかげ持つ古洗面器の小さき穴ゆ零のリンチ頭(ず)に小止(おや)みなし
- ・死ぬものかリンチを受けて果てんには小さき生命も軽からぬなり

同僚の兵士たちは、最初は同情の眼で渡部さんを見ていたようでしたが、いつの間にか、渡部さんを変わり者、厄介な存在として見つめるようになっていきました。

これらの短歌は900首にも及んでいますが、敗戦後帰国する時に軍衣服に縫い込んで持ち帰ってきました。しかしこの短歌をすぐ世に問うことはしませんでした。英雄的に特別扱いされることを恐れたからです。ご本人との手紙とはがきでの通信がありますが、約10年前の最初の長文の手紙に次のような言葉が記されていました。

「私にとって、何故あの時声をあげ、叫び、上官にそして同僚に、やめてくれ、殺すな、といわなかったのか、身みずからをかこつだけで、主の教えをふみとおさなかったのかが、五十四年を経て尚、重くのしかかり、敗戦の日に、学徒出陣の神無月二十一日がめぐるとき、あるいは年を改めるとき、年を送る夜は、み前に伏し許しを乞い、どうしたらこの大罪を贖することができるかに迷い苦しみ続けております。沈黙という大罪の前に、この身の存在はあまりにも小さく信仰貧しく、思想が脆弱すぎました」(1999年8月25日付)。

今日の聖書の箇所にも、「あなたがたは空模様を見分けることは知っているのに、時代のしるしは見ることができないのか」とあります。今、立っている自分の足元を掘り下げる時、時代や歴史、意味が問われ、自らの判断力と方向性が問われていると言えます。

判断を下し実行していくには、大変なエネルギーが求められます。足元から不安と恐れに襲われます。私たちは相手のたったの一言で、足元から崩されていく弱い存在であることを経験しています。

聖書に、「人を恐れると、わなに陥る、主に信頼する者は安らかである」(口語訳 箴言29章25節)という言葉があります。これは個人にとり最終的な判断の基準となるかもしれません。

「あなたがたは、時を見分けることができないのか」との問いに、応えていく一人の人間でありたいものです。

〔参考文献〕

渡部良三 『小さな抵抗』 岩波書店 2011年

2017年5月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録